

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 23 日現在

機関番号：13903

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520020

研究課題名（和文）正義論を基軸とした老年の哲学の構築

研究課題名（英文）Establishing the Philosophy of Old age based on Theory of Justice

研究代表者

瀬口 昌久 (SEGUCHI MASAHISA)

名古屋工業大学・工学研究科・教授

研究者番号：40262943

研究成果の概要（和文）：プラトンとアリストテレスが、それぞれの心身観にもとづいて対照的な老年論を示したことは、ヘレニズム・ローマ時代の哲学において、老年を哲学の主題とすることに寄与した。それはとくに、老年期において政治や社会との関係をいかにもつべきかという問題として、キケロやプルタルコスやセネカたちによって問われることになった。つまり、人間の生涯全体を通して共同体や政治に関わる意義や必要性が認められるのか、それとも実践的生活から離れた観想的な生活や閑暇（オーティウム）こそが老年の理想の生き方であるのかといった対比で、老人の政治的・社会的役割が繰り返し問われることになったのである。プラトンの老年論の系譜をひくキケロやプルタルコスは老年を人間の成熟の時期とみなして、老人がもつべき権威や教育の役割を強調し、そのため老人みずからが徳を身につけなければならないと主張した。他方、セネカは、正義や政治からは距離を置いた閑暇のなかで、自然学や神学などの観想的な学問を追究することを重視し、エピクロス派は、老年とは原子と空虚を原理とする自然が永劫に繰り返す世代交代の営みの一瞬にすぎないとみなし、公共性や国家や正義を原理的考察の枠外に置くことになった。

研究成果の概要（英文）：Based on their own personal observations of the mind and body, Plato and Aristotle exhibited contrasting ageing theories which contributed to Hellenistic and Roman era philosophy on the subject of ageing. This especially deals with the questions inquired by Cicero, Plutarch, and Seneca on the how the elderly should be involved in politics and society. That is, in comparing whether or not it should be recognized that there is a significance and necessity in lifelong involvement in consortiums and politics, or is it more ideal for the elderly to have a contemplative and leisurely life style (otium). It is the comparisons of these two views in the role of the elderly in politics and society that has been considered time and time again. Drawing a genealogy of Plato's ageing theory, Cicero and Plutarch consider the elder years of life to be the period of maturation, stressing the influence and role of education that the elderly should have, and the importance of the elderly to carry high moral standards. On the other hand, Seneca placed importance on focusing on learning in the natural sciences, theology and other contemplative studies within the leisurely time one has away from the judiciary and political realms. In the Epicurus school, old age is viewed as only a momentary part of the everlasting cycle natural mechanism of atoms and vacancy and is left out of consideration in commonality, patriotism and judiciary realms.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2010年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2011年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2012年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| | | | |
| 総計 | 1,700,000 | 510,000 | 2,210,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：正義論、老年論、古代哲学、老年の哲学、プラトン、アリストテレス、キケロ、セネカ

1. 研究開始当初の背景

日本社会の少子高齢化が「問題」として語られるようになってすでに久しい。「高齢社会白書」によれば、2010年11月現在で65歳以上の高齢者が人口に占める割合は23.1%に達し、75歳以上の「後期高齢者」の割合は11.2%に及ぶ。日本の高齢社会の特色は、他国に例を見ないこの高い割合にあるだけではなく、高齢化が進行したスピードにある。日本の高齢者人口は1950年には5%にすぎなかったが、1970年に「高齢化社会」の指標とされる7%になると、1997年には14%を超えて「高齢社会」に入った。ヨーロッパでも高齢社会は存在するが、それらの国々の多くが100年あまりの歳月をかけて高齢化社会から徐々に高齢社会に達し、その間に社会基盤などを整備してきたのに対して、日本は約25年間というきわめて短い期間で高齢化社会から高齢社会に達したことが大きく異なる。日本では高齢化の急激なスピードに社会制度や施策が追いつかず、労働人口の減少と、介護や医療や年金などの社会保障費の増大という観点から、経済と社会の衰退をもたらす最も大きな社会問題とされている。高齢や老年は、社会対策が急務の処置すべき政策的課題として、医療福祉や社会科学の分野で取り扱われる対象となった。

しかし、高齢者の増加にいかに対処すべきかといった観点からの方策や立案には、人間がみずからの老年をいかによく生きるかという本質的な問いが、十分に汲み取られ斟酌されているとはいえない。高齢社会の問題は喧しく論じられても、老年を内面から支える精神的な基盤を問はず議論が、日本社会には欠落しているのではないか。そのため、そのような欠落を補うかのように、文学者やマスコミで活躍した著名人によって老後をよく生きるための秘訣や老いの個人的体験

を綴ったエッセイが数多く書かれて、広く読まれているように私には思われる。これに対して、哲学のなかからは、老年をよく生きるための知の探求や考察はまだ数少ない。日本倫理学会が第五八大会（2007年）で「老い」を共通課題として取り上げたことが目につくくらいで、『老いの空白』（鷺田清一、弘文堂、2003年）という著作のタイトルが示すように、老年は哲学の空白地帯におかれていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、西洋古代思想における老年論を網羅的に取り上げるのではなく、正義という観点から老年論の伝統のなかに見られる思考の筋目を浮かび上がらせることにある。そのためプラトンとアリストテレスの老年観の対比を基軸として、叙事詩からはじめてストア派やエピクロス派や中期プラトン主義までの古代世界の老年の哲学について、正義論の観点から老年の哲学の基礎を構築することにある。

3. 研究の方法

初年度の項目は以下の範囲で行った。

(1) 古代世界における多様な老年像の考察
一 抒情詩、寓話を含む古代文学における多様な老年像を考察する

二 ホメロスのなかの老年像——「老賢者の理想とポスト英雄時代の老年像の対比」

三 ヘシオドス——「人間の成熟と老後の世話の重要性」

四 悲劇における老年——「悲観的な老年像の支配」

五 喜劇のなかの老年——「世代間の争いと老年のもつ政治性」

平成22年度には、ホメロスをはじめとする西洋古典文学と古代世界における老年像を主として考察した。一例として三のヘシオドスに関しては、『神統記』の「女の誕生」の物語と、『仕事と日』で語られる「五時代説話」に着目する。とくに、後者においては、G・S・カークが指摘するように、この五種族の物語の最もオリジナルな点が「成熟」に強調が置かれていることにあり、老年と正義がオーバーラップして取り上げられていることに着目した。この五種族の説話に引き続いて、正義が主題化され、正義こそが若さのもつ「傲慢や暴力（ヒュプリス）」に勝利するものであり、人間に幸福を約束し、ゼウスが人間に与えたもので正義にまさるものがないことが高らかに歌われているからである。この神話において対比されているのは、ヒュプリスと正義である。つまり、人間としての成熟をはかる最も重要な尺度が、傲慢さと暴力に打ち克つ正義を身につけているか否かの一点にかかっている。老年と正義を結びつける明確なモチーフが、プラトンに先立ってヘシオドスのなかに見出すことができること、そしてプラトンへのその影響を検証するといった方法で研究を実施した。

次年度には、古代文学から本格的に哲学に向かい、プラトンとアリストテレスの老年観を取り押さえて、以下の3点に関して、それぞれの項目に関する文献の調査と比較検討を行った。

(2) プラトンとアリストテレスの老年観

一 プラトンの老年論と自然学的理論——

『ティマイオス』

- ①プラトン『ティマイオス』のコスモロジーの骨格のとりまとめ
- ②生命活動の源としての髓の重要性と老化のプロセスの調査
- ③プラトンの老年と病気の区別の検討
- ④身体と精神の運動と調和についての考察

二 アリストテレスの老年論と自然学的理論——『自然学小論集』

- ①「冷」と「乾燥」——老化の二つの原理についての分析
- ②生得的な生命熱とは何かの考察
- ③生命熱と知的能力の関連性の調査
- ④アリストテレスの老年と病気の位置づけ

三 プラトンとアリストテレスの老年論の比較

- ①ボーヴォワールへの批判の再検討
- ②プラトンの「老年」の自然学的理論と心身の衰弱についての検討

③晩学（オプシマティア）についてのプラトンの見解を調査

- ④アリストテレスの「老年」の自然学的理論と老年の心身の衰弱についての検討
- ⑤老年を示す用語の異なる用法語の調査
- ⑥アリストテレスの老年論のスキームの調査
- ⑦アリストテレスの『弁論術』の老年像の調査確認
- ⑧老人の政治的社会的位置づけは同じか
- ⑨プラトン『法律』における国家の要職者の年齢規定の検討
- ⑩老いた両親への態度の比較

以上の項目について、テキストと先行研究を検討し、プラトンとアリストテレスの心身の相違に根ざした老年の哲学のとりまとめを行った。

引き続き、以下の項目について考察を行った。

(3) ヘレニズム・ローマ期の老年像の変遷の考察

一 プラトンの老年論の系譜をたどる——

キケロの「悦ばしい老年」

- ①キケロの生涯について
- ②『老年について』著作の意図と作品の設定
- ③老年をめぐる四つの誤解とその反論の考察
- ④「元老院（セナートゥス）」に位置づけ
- ⑤「公の活動」と「世代間倫理」の関係
- ⑥肉体と肉体的快楽の衰えについて
- ⑦死の近さと魂の不死の教説の関係
- ⑧老年と成熟の問題

二 プルタルコスと老人の政治参加についての考察

- ①中期プラトニストの位置づけ
- ②『老人は政治に参加すべきか』概説
- ③老年を理由に公的生活から引退すべきでないことの主張の検討
- ④老年に適切な仕事と若者への教育的役割の考察
- ⑤日常のなかの政治と哲学との関係再考
- ⑥キケロとプルタルコスの老年論の比較
- ⑦プルタルコスの老年論の意図
- ⑧晩年の理想としての閑暇とは何か

三 セネカー閑暇の意義の確認

- ①『閑暇について』概説
- ②『人生の短さについて』概説
- ③オーティウムとスコレーと観想の関係
- ④老年と自殺との関係の考察

四 エピクロス派の老年論の考察

- ①古代原子論のなかの老年論を探る
- ②ルクレティウス『事物の本性について』の老年論の考察
- ③魂の老化と死の恐れの関係

④エピクロス派への批判

五 ガレノスの老年論の考察

4. 研究成果

老年をよく生きることは、太古から連綿と人間が考え続けてきた普遍的なテーマであり、正義の徳が勇気や知恵や節制の他の徳を可能にするとプラトンが論じたように（『国家』第四巻）、西洋古代思想のなかでは、正義こそがよく生きることのつねに中心に位置する徳（卓越性）であり理念であった。共同体や人間がよく行動するためには道理にかなった正しい選択が不可欠であり、そのため西洋古代世界では、ホメロスが描いたネストルに代表されるように、経験に裏打ちされた老人の政治的知恵と人々を説得する言論が尊重された。他方で、老人に対する公共の福祉がなかったために、両親の老後の世話（ゲーロトロポス）が子供の責務とされ、ヘシオドスが語るようにその義務に反することは、正義に最も反する行為であり、そのような不正につながる傲慢（ヒュプリス）を克服して、人間を成熟させるものも正義の徳であると考えられていた。ホメロスやヘシオドスの叙事詩の時代から、「老年と正義」が重要な主題の一つとして考察されてきた知的伝統があったのである。悲劇や喜劇においても、世代間の価値観の相克や葛藤という設定で、老年と正義は重要なモチーフとされ、悲劇では老年の悲惨な運命が悲嘆の的となり、神の正義が問いかけられる一方で、古喜劇では社会の大きな変化によって時代遅れとみなされていた老人たちの正義の主張に光が当てられ、笑いの源泉とされると同時に鋭い社会批判となっていた。

プラトンは、そのような叙事詩、悲劇、喜劇の文学の伝統を引き受け、老年について明確な問いを立てて、宗教や政治思想に自然科学的研究を統合する仕方で、西洋思想史上初めて老年の哲学を展開した。プラトンは、宇宙論的な枠組みのなかで、魂を基本とする心身観を提示し、老化の生理学的説明を試み、心身の運動の均衡をとることを勧め、老人のすぐれた経験知を生かす政治的仕組みや教育的役割を考察している。これに対して、アリストテレスは、膨大な生物学的研究にもとづき、「冷」と「乾燥」をあらゆる自然現象をつらぬく老化の基本原則と見定めて、壮年を人間の成熟期とみなし、老年を心身の衰弱の時期と位置づけた。アリストテレスの老年理論は、後代の医学思想に明確な方向性を与えただけでなく、政治学的著作で語られた老人の政治支配に対する批判が老人から政治的役割を剥奪する方向に作用し、修辭学的著

作で述べられた政治性をもたない老年の性格分析とその老年像が、古代ギリシアの新喜劇の文学造形に影響を与え、古代ローマの喜劇を介して西洋近代文学に引き継がれて、西洋の文化と精神に深い影響を及ぼすことになった。

プラトンとアリストテレスが、それぞれの心身観にもとづいて対照的な老年論を示したことは、ヘレニズム・ローマ時代の哲学において、老年を哲学の主題とすることに寄与した。それはとくに、老年期において政治や社会との関係をいかにもつべきかという問題として、キケロやプルタルコスやセネカたちによって問われることになった。つまり、人間の生涯全体を通して共同体や政治に関わる意義や必要性が認められるのか、それとも実践的生活から離れた観想的生活や閑暇（オーティウム）こそが老年の理想の生き方であるのかといった対比で、老人の政治的・社会的役割が繰り返し問われることになったのである。プラトンの老年論の系譜をひくキケロやプルタルコスは老年を人間の成熟の時期とみなして、老人がもつべき権威や教育の役割を強調し、そのため老人みずからが徳を身につけなければならないと主張した。他方、セネカは、正義や政治からは距離を置いた閑暇のなかで、自然学や神学などの観想的学問を追究することを重視し、エピクロス派は、老年とは原子と空虚を原理とする自然が永劫に繰り返す世代交代の営みの一瞬にすぎないとみなし、公共性や国家や正義を原理的考察の枠外に置くことになった。

プラトンとアリストテレスの老年の哲学は、ともに古代ギリシアの文化的伝統の総体を射程に入れながらも、際立って異なる老年理解の方向性を生み出す決定的な分岐点をなしている。老年をよく生きるために、われわれがこのような西洋古代思想の老年論の伝統から学ぶことは、今なお少なくないように思われる。われわれが見てきたような広がりをもつ正義の観点から語られた現代の老年論は、日本ではあまり聞かれないからである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

①瀬口昌久、「ロゴスのロゴス性—合理性の原像を求めて」、中部哲学会年報、査読有、2011、42号 pp.17-34頁

〔学会発表〕（計1件）

①瀬口昌久「自然と技術—そのプラトンの転

回」、関西哲学会、2012年10月28日

〔図書〕(計1件)

①瀬口昌久、『老年と正義—西洋古代思想にみる老年の哲学』、名古屋大学出版会、2011年

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

瀬口 昌久 (SEGUCHI MASAHI SA)

名古屋工業大学・工学研究科・教授

研究者番号: 40262943

(2) 研究分担者 なし

()

研究者番号:

(3) 連携研究者 なし

()

研究者番号: